

## 2023年度 学校評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

報告者（校長 菊地 知恵子）

### I 自己評価

#### 1. 本校の教育目標

「校訓」知性・根気・友愛

#### 2. 本年度の重点目標

- 1) 探究型の学びの発展
- 2) 情報を読み取る力（「ニュースリテラシー教育」）と批判的思考への発展
- 3) 「対話」からの視点をもつ
- 4) （自閉症児）伝える力をつける

#### 3. 重点目標についての評価（A～D）と取り組み状況や課題

A・・・達成できた B・・・概ね達成できた C・・・達成が不十分 D・・・達成できていない

##### 1) 探究型の学びの発展（A）

探究型の授業は各教科で行われている。殊に『探究科』（1、2年生）授業の成果としての、学園祭でのプレゼンテーション（1年生ゼミ、2年生個人探究）は充実し、保護者の方からの評価も高い。カリキュラムマネジメントの考え方から生み出され、今年5年目となる『教科横断型授業（通称コラボ授業）』では、各教科の学びが分野の異なる複数要素につながる思考体験を積んでいる。教科横断型の授業はすでに年間カリキュラム内に定着しており、なおも各教科の教員たちが連携して、新たな教材開発の試みがなされている。

##### 2) 情報を読み取る力（「ニュースリテラシー教育」）と批判的思考への発展（A）

生徒がネットを中心として膨大な情報に触れる機会が増えたことから、情報を正しく読み取る力をつけるため、『生命科』の単元に「ニュースリテラシー」を位置づけて2年目となる。『生命科』の授業では、フェイクニュースを見抜く手立てや発信者によるニュースの論じ方の違いなどを知り、批判的思考の素地を身に付けた。外部講師によるニュースリテラシーについての講演会を行ったほか、『生命科』以外の授業内でも資料等を扱う際には批判的な思考を用いるなどの視点をもって指導にあたり成果があった。

##### 3) 「対話」からの視点をもつ（B）

過去3年間、コロナ禍の影響下で直接のコミュニケーションがとりにくかったことから、

今年度は視野を外へ向けていくことを目的に、実際の経験とともにある「対話」を重視した。授業や友愛会（生徒会）活動において「対話」の機会を増やして積極的に取り組んだ。教科授業では意見交換、役割を決めてのロールプレイなどを行い、思考の幅を広げることができた。『生命科』では、諸課題に関するディベートを行い、様々な立場からの視点を持たせることができた。諸行事をはじめとして学校生活での経験は従来に近い形に戻り、おおぜいが集まっての活動では意見も活発に交わされるようになった。ただし、討論に高めるまでには至っていない。

#### 4) (自閉症児) 伝える力をつける (A)

キャリア教育を大きな目標に掲げ、「伝える力をつける」を重点にしてコミュニケーション力の強化に取り組んだ。コミュニケーション力は「伝える力」のみならず「聞く力」「受け取る力」があって成り立つものであるため、学校生活のクラスや友愛会活動での活動や、学校と家庭が連携しての活動など、あらゆる機会において意識的に取り組んだ。その結果、それらの経験が相乗効果をあげ、コミュニケーション力が高まった。

### 4. 総合的な評価と今後の課題

新型コロナウイルスの流行が収束におかき、今年度は感染予防をしながら行事や校外学習を従来に近い形で実施することができた。合唱コンクールの外部会場での実施、学園祭への卒業生の来校、人数制限なく保護者が行事に来校するなど外部への広がりが生まれ、生徒は経験の幅を広げることができた。大人数が集まっての活動ができるようになったことで混合教育も推進でき、生徒の心の成長にもつながった。

外部からの評価として、『探究科』の2年生の個人作品を応募している「全国学芸・サイエンスコンクール」（主催：旺文社）では2名が入選し、5年連続の上位入賞となった。また「毎日カップ 中学校体力づくりコンテスト」（主催：毎日新聞社）では今年度は全国4072校中上位13位にあたる『優良賞』を受賞した。さらに重点強化としている英語では、全員が英語検定を受検しており、3年生の83.8%が準2級（高校中級程度）以上を取得し、過去最高レベルとなった。

今後の課題としては、コロナ禍により変更せざるを得なかった校外学習について、再構築していくことがあげられる。

## II 学校関係者評価

- 1) 今年度の取り組みは、アフターコロナの時代に対応した内容であったと感じる。各行事はコロナ禍で培った経験が生かされ、コロナ前よりも工夫され進化していた。ここ数年の制限された環境下でも、できないことを挙げるよりも、できることに実直に取り組んだ教職員の成果だと感じている。

- 2) 今年度はコロナ禍前と近い学校行事となり、生徒にとってさらに充実した学校生活となった。合唱コンクールは外部のホールで開催され、また校内行事も保護者の観覧人数枠が増え、学園祭では外部公開を行い、それぞれの行事が大変盛り上がった。

学習面においては、特に教科横断型のコラボ授業に注目しており、柔軟な発想や活用が身につく理解がより深まったのではないかと思う。また『生命科』、『探究科』といった武蔵野東中学校ならではの取り組みは、命の尊さや、より高い思考と探究力を学ぶことができ、人として大きな成長につながったと思う。

自閉症児クラスと健常児クラスとの混合教育も、互いに認めあい理解しあうことを体感することができ、貴重な学びであった。多様性の尊重が求められている今、混合教育によって明るい未来、共生社会へ向けての礎がつくられたのではないか。

進路指導においては3年生からの特別進学学習で仲間と切磋琢磨しあうことにより力をつけることができた。学力面については素晴らしい指導であった。しかし気になる点としてはより一層早い段階から受験に対するノウハウや、具体的な情報提供を保護者に行う必要性を感じることである。

- 3) 自己評価にある通りの取り組みが行われている。3年生最後の授業参観で、『生命科』の死生観についての個人発表を聞いたが、これまでの取り組みの成果が表れていると感じた。生徒一人ひとりがそれぞれ個性豊かに自分の考えを自由にのびのびと述べていた。意見を聞く回りのクラスメイトの反応にも温かさがあった。混合教育の理念に誇りを持つ熱意ある先生方に見守られ、生徒は先生を尊敬し学校に好意を持ち、安心できる環境でみな伸びやかに成長できたと思う。

- 4) 『探究科』では生徒自らが探究可能なテーマを決め、試行錯誤を重ねながら探究し、プレゼンテーション用の資料を作成して大勢の前で発表し質疑応答を経験する。この一連の流れを中学生の時に経験することが、座学では学べない成果である。視野が広がり、その後の人生に大きく生きてくるのではないか。

1、2年生の英語と数学の習熟度別グループ編成は、テスト結果ごとに編成替えがあることとモチベーションが上がる一方、学力の差を感じる可能性があり、ギャップを埋める対策が必要ではないか。